

『建礼門院右京大夫集』における夢——象徴と比喩——

今 関 敏 子

キーワード 夢 象徴 比喩 昔 今

要 旨

一、はじめに——睡眠時の夢と比喩の夢

『建礼門院右京大夫集』には、睡眠時にみた夢の記述が2例しかない。一方、現実の儚さ、信じ難さを「夢」に譬える用例は多い。夢はいずれも時間認識と連関する。

『更級日記』は、『蜻蛉日記』『とはすがたり』<sup>①</sup>と並んで、睡眠中にみた夢の記述が多く、それが作品を特徴づけている作品である。現実と夢は往還して作者の真実を紡ぎだす。夢の記述11例は、そのほとんどが夢告げである。当時の人々は夢を信じており、寺社に参籠しては夢告げを得た。夢は異界からのメッセージであり、現実生活の指針となり得たのである。

時間は通常、流れるものと認識される。しかし、源平の争乱、平家滅亡、愛する人の死という、大きな喪失体験は、時間認識を変えてしまう。夢としか観じようのない喪失を境に、時間は「昔」と「今」に分断されて捉えられる。このような認識では、たとえば、『更級日記』のような夢の記述はなさににくい。

時間認識の分断を齎した喪失に対して、夢の比喩が盛んに用いられる。また、睡眠時の夢2例の記述は、作品の主題である「愛と死」を象徴する。

『更級日記』において、夢を記述することは、作者の内面の変容と成長を語るものとして重要であった。作品最後の夢では、阿弥陀仏来迎の確証を得ている。夢の記述の完結である。そして、孝標女の人生そのものも、いよいよ完成期を迎えようとしている矢先に夫の死に遭遇する。

○九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に『夢』のやうに見ないて思ふこころ、世の中にまたたくひあることともおほえず

(一〇六頁)<sup>②</sup>

○(上略)すべてたとへむかたなきままに、やがて「夢路」に

まどひてぞ思ふに、その人や見にけむかし。昔より、よしなき物語歌のことをみ心にしめで、夜昼思ひておこなひせましかば、いとかかる「夢の世」をばみずもやあらまし。(一〇七頁)

○年月は過ぎゆけど、「夢」のやうなりしほどを思ひ出づれば、ここちもまどひ、目もかきくらすやうなれば、そのほどのことは、またさだかにもおぼえず。(一一一頁)

子 敏 関 今  
ここに書かれる「夢」は、睡眠時にみた夢ではなく、比喻としての「夢」である。夫を亡くした現実を「夢」と観じているのである。妻として母としての生活も軌道に乗り、自らの意志で旅をし、友情を育み、安定して豊かな中年期を終えようとしていた矢先、夫は急逝した。その折の衝撃と喪失感が「夢」と表現されている。夫の死に遭遇するまでは、孝標女が現実生活のある面を「夢」に譬えることはなかったのである。

睡眠中に見る夢と比喻の夢と——『更級日記』には二通りの夢が書かれている。現実の儚さ、信じ難さはよく夢に譬えられる。たとえば、きわめて劇的な構成をもつ鎌倉時代の作品『うたたね』には、失恋の果てに出奔、病に臥す場面に次の歌がある。

はかなしな短き夜半の草枕結ぶともなきうたたねの「夢」

(一六九頁)<sup>⑤</sup>

夢をみたという記述はこの作品の中にはないが、この歌の「うたたねの夢」は、作品の題名に繋がると考え得る。失恋体験をめぐって作品世界に体现されることはすべて夢のように儚いもの、という意味づけである。

誰しも夢は見る。しかし、夢を書く人と書かない人がいる。平安鎌倉期の自伝的な作品にも夢の記述のない作品はある。<sup>⑥</sup>本稿では、夢の記述がきわめて少ない作品をとりあげる。

『建礼門院右京大夫集』(以下『右京大夫集』と略す)は、自伝的な歌集である。その構成がほぼ時間序列に従っており、長文の詞書が重要な「語る」役割を果たしていること、主題性があることから、家集にも日記文学にもジャンル分けし得る作品である。

右京大夫は高倉天皇中宮徳子に仕えた女房であった。天皇と中宮を日と月と仰ぎ、廷臣や女房たちと宮中で才気縦横に交遊した。そうした中で、重盛の息である平家の公達平資盛に出会い恋に落ちる。資盛と右京大夫の間柄は、常に安定と幸福感を齎すものではなかったが、後に思えば何と幸せな日々であったことか。平家都落ちに続く滅亡。資盛の若い命も歴史の波に吞まれるように散った。その喪失体験を契機に過去を回想して構築したのが、作品である。作品には資盛をめぐる愛と死というテーマが明確である。<sup>⑦</sup>

この作品には、睡眠時にみる夢の記述がわずか2例にすぎない。一方、比喩の夢は豊富である。睡眠中の夢も比喩の夢もそれが言語化される場合には、時間認識と関連していることが多いように思われる。この観点から、『右京大夫集』の夢をめぐって考えてみたい。

## 二、恋と夢

### I 資盛

宮仕えをしていると、他者の恋の噂が耳に入る。右京大夫は、恋に関しては、「なべての人のやうにはあらじ」(61詞書)<sup>⑧</sup>——皆と同じ様には恋などすまいと思ひ決めていた。しかし、「契りとかやはのがれがたくて、思ひのほかは物思はしきこと」が添う身となる。堅い意志とはうらはらに資盛と愛し合うようになる。新興権門の公達は、当時正妻が決まる大切な時期であった。二人の間柄は秘密にしなければならぬ。恋に物思いはつきものであるが、秘めた恋ではさらに辛い。逢瀬もままならぬ恋に右京大夫は身を委ねることになる。相手の心の動き、自身の立場の配慮に揺れ動く恋である。世の中の動きも不穏になっていく。右京大夫が宮仕えを退いていた頃の叙述をみよう。

おほかたの世騒がしく、心細きやうに聞えし頃などは、

蔵人頭にて、ことに心のひま無げなりしうへ、あたりなりし人も、「あいなきことなり」などいふこともありて、さらにまたありしよりけに忍びなどして、おのづからとかくためらひてぞ、物いひなどせしをりをりも、(後略)

(204詞書)

「あいなきこと」(軽々しいふるまい)と非難されても仕方のない仲であればこそ、源平の争乱期に多忙な蔵人頭であった資盛とはさらに遠慮がちに人目を憚っていたことが知られる箇所である。

右京大夫は、逢瀬も思うにまかせぬ迷いの多い辛い恋の経緯を歌に託し、そのプロセスをほぼ時間序列に従って綴る。しかし、突然、時間が逆行し、恋の初めの記述に戻る箇所がある。

はじめつかたは、なべてあることとおほえず、いみじう物のつつましくて、あさゆふ見かはすかたへの人々も、まして男たちも、知られなばいかにとのみかなしくおほえしかば、手習ひにせられしは、

132 散らすなよ散ちらさばいかがつらからむしのぶの山にし  
のぶ言の葉

133 恋路にはまよひいらじと思ひしをうき契りにもひかれぬ  
るかな

134 いくよしもあらじと思ふかたにのみなぐさむれどもなほ

ぞかなしき

恋の物思いが身に添うようになったのははじめの頃は、それが、恥かしく、人に知られることを極端なまでに恐れていた心情が表現されている。これは、初々しい純情というものではなく（そのような面もあるが）、資盛との間柄が秘密にすべきものだったからである。

## II 隆信

そして、この直後に、次のような記述がある。

そのかみ、思ひかけぬところにて、よ人よりも色好むと聞く人、よしある尼と物語りしつ、夜もふけぬるに、近く人のあるけはひのじるかりけるにや、頃はうづきの十日なりけるに、「月のひかりもほのほのにて、けしき見えじ」などいひて、人につたへて。その男はなにがしの宰相中将とぞ。

135 思ひわくかたもなぎさによる波のいとかく袖をぬらすべしやは

と申したりしかへし

136 思ひわかでなにとなぎさの波ならばぬるらむ袖のゆゑもあらじを

「よ人よりも色好むときく人」——もう一人の恋の相手、藤原隆信の登場である。隆信は出会った機会を逃さず、巧みに

右京大夫に歌を詠みかける。右に挙げた135番歌に始まる154番歌までは、隆信と右京大夫の贈答歌を集中して配列した一連とみなされてきた。

ここで注意したいのは、135番歌詞書にある「そのかみ」が「当時」の意であることであり、資盛と出会った「はじめつかた」（132～134番歌詞書）と重なることである<sup>⑨</sup>。すなわち、資盛との恋が始まって間もなく、隆信と出会ったのである。従って記述上の時間の逆行は、同時進行した恋の相手、隆信について語るための必然である。

恋の手管に長けた中年の貴公子隆信は魅力ある教養人であった。迷いの多い右京大夫の心に巧みに揺さぶりをかける。隆信は資盛の存在を知ると、挑発するような歌（「139浦やましいかなる風のなさけにてたく藻のけぶりうちなびきけむ」——羨ましい、どのような情愛に惹かれてあなたはその人になびいたのでしょう）を詠みかけてくる。右京大夫も機知ある歌を返しなどしているうちに、逢坂の関を越える仲となるのである。

## III 隆信歌群について

135～154番歌群は、このようなプロセスをまとめて配列したものと見なされ、隆信歌群とも呼ばれてきた。しかし、135～154番歌群は隆信と右京大夫の贈答歌のみで構成されているわ

けではない。

次に掲げる146、147番歌は、『玉葉集』には、資盛と右京大夫として記載されているのである。

車おこせつつ、人のもとへ行きなどせしに、「主つよく定まるべし」など聞きし頃、なれぬる枕に、硯の見えしをひきよせて、書きつくる。

146たれが香に思ひうつると忘るな夜な夜なれし枕ばかりは

「かへりてのち見つけたる」とて、やがてあれより

147心にも袖にもとまるうつり香を枕にのみや契りおくべき  
研究史上、147番歌の作者を隆信とみて、『玉葉集』の誤解とする見方が優勢である。むしろ、これは、135～154番歌群を一連の隆信歌群と解したための無理な見解ではないかと思われる。夙に論じたごとく、資盛作とみて何の不自然もあるまい。資盛に正妻が決まる（主つよくさだまるべし）という大切な時期、人目を避けて、資盛が車を寄越し、二人は密会していたのである。146番歌は、正妻に資盛の愛情が移ってしまうのではないかという不安と悲しみを流露した右京大夫歌である。

#### IV 贈答歌と夢

この隆信歌群と見なされてきた最後の贈答歌に「夢」が詠

み込まれているのである。『右京大夫集』の夢の記述の初出である。

絶え間久しく思ひ出でたるに、「ただやあらまし」とかへすがへす思ひしかど、心よわくて行きたりしに、車より降るるを見て、「世にありけるは」と申ししを聞きて、心ちにふとおぼえし。

152ありけりといふにつらさのまさるかな無きになしつづ過ぐしつるほど

〔夢〕にいつもいつも見えしを、「心の通ふにはあらじを、あやしうこそ」と申したりしかへり事に、

153通ひける心のほどは夜をかさね見ゆるむ〔夢〕に思ひあはせよ

かへし

154げにもその心のほどや見えつらむ〔夢〕にもつらきけしきなりつる

153、154番歌も資盛と右京大夫の贈答として、『玉葉集』恋五に記載されている贈答歌である。ここもまた、隆信であるとする説が有力であった。しかし、（すでに論じたことを繰り返すことになるが）、右京大夫が迎えの車に乗って会いに行く相手は資盛と考えるのが自然であろう。

152～154番歌は、同じ人物（資盛）との逢瀬を描いたものとして連鎖していよう。先の見えぬ辛い恋に何度も関係を断ち

切ろうと悩み、そうは出来ないできた。その上、もうひとつの恋が進行する。そんな時、長いこと逢わずにいた資盛が思い出して車を寄越した。やめようかどうしようかと迷いつつ、  
「またも強い意志を通せず（心よわくて）資盛のもとへ行く。車から降りるのを見て、資盛は「生きていたんだね」（世にありけるは）——どうしているかと思っていたよ、ずいぶん久しぶりだね——と声をかけた。会わずにいた間の何と苦しかったことか。それをこう言われては。153番歌は、耐えてきた日々であったことをあらためて思い知らされた辛さを詠む。」

子 関 敏 今

しかし、現実には逢わずとも夢には現われる恋人に、右京大夫は「ずいぶんお会いしなかった、（世にありけるは）」とおっしゃるくらいですもの、でも夢ではお会いしてしましたよ、変ですね、心が通っているわけでもないのに」と語りかける。それに答えて資盛は、「心は通っていたでしょう、夜毎の夢を考えあわせてごらんなさい。（夢を信じればよいのですよ）」（153番歌）と詠んだ。右京大夫は、「ほんとうにその通り、夢の中でもつれないご様子でした」（154番歌）と返したのである。相手を夢にみるのが、心の交流を示すという前提は、恋歌の常套である。そして当然のことながら、ここには言葉の遊戯的要素が濃厚である。

135〜154番歌は、隆信と右京大夫の恋を語るべく隆信との贈

答歌のみが集められているのではない。二人の男性と同時進行の恋がいかなるものであったかを語る必然として、配列されているのである。

事の渦中にあつては判断が出来ず、翻弄され、混乱する。しかし、後に回想すれば隆信と右京大夫の間柄は、長い人生からみれば一時の駆け抜けるような恋であった。一方、資盛への思いは生涯続くのである。「夢」の語を含む贈答は、隆信の出現で同時進行の恋の当事者となった右京大夫が、苦しい状況の中で資盛への愛情を確認する一齣であつたと思われる。

### 三、平家都落ち

#### I 資盛の夢

辛い恋ではあつたが、後に思えば、なつかしい日々であつた。源平の争乱により、世の中は大きく変わる。資盛と右京大夫を取り巻く環境も以前とは同じではない。日に日に平家は追い詰められていく。そのさなかの資盛の言葉である。

「かかる世の騒ぎになりぬれば、はかなき数にならむことは、疑ひなきことなり。さらば、さすがに露ばかりのあはれはかけてむや。たとひ何とも思はずとも、かやうに聞えなれても、とし月といふばかり

になりぬるなさけに、道の光もかならず思ひやれ。

また、もし命たとひ今しばしなどありとも、すべて今は、心を昔の身とは思はじと思ひしたためてなむある。そのゆゑは、物をあはれとも、何のなごり、その人のことなど思ひ立ちなば、思ふ限りも及ぶまじ。心弱さもいかなるべしとも身ながらおほえねば、なにごとと思ひ捨てて、人のもとへ、『さても』などいひて文やることなども、いづくの浦よりもせじと思ひとりたるを、『なほざりにて聞えぬ』などなおほしそ。よろづ、ただ今より身をかへたる身と思ひなりぬるを、なほともすればもとの心になりぬべきなむ、いとくちをしき」  
(204 詞書)

逢うことは諦め、死を覚悟し、菩提を申うように、と言い置き、ついに資盛は都を後にした。

そのような中で資盛の夢を見る。二つ目の夢の記述である。

恐ろしきものふども、いくらも下る。何かと聞けば、いかなることをいつ聞かむと、かなしく心憂く、泣く泣く寝たる夢に、つねに見しままの直衣姿にて、風のおびただしく吹く所に、いと物思はしげにうちながめてあると見て、さわぐ心に覚めたる心ち、いふべきかたなし。ただ今も、げにさてもやあるら

むと思ひやられて、

207 波風の荒きさわぎにただよひてさこそはやすき空なかるらめ

都を追われ、果てしない旅の空にいる、もはや会うことは決してかなわぬ資盛の夢である。いつもの見慣れた姿のまま、風がひどく吹く中に辛そうに一人物思いに沈む愛する人の姿。不安と絶望を象徴する夢であろう。覚めて後、「さらば亡くなりなばや」(死んでしまいたい)と思うほど、右京大夫は衝撃を受ける。「208 憂きうへのなほ憂きことを聞かぬさきにこの世のほかになりもしなばや」「209 あらるべき心ちもせぬになほ消えて今日まで経るぞかなしかりけり」——これ以上悲しいことを聞かないうちに世を去りたい、意味もないのに生きていることが悲しいという心情を歌に託している。

この夢は、右京大夫の心に深く沈潜した。後に資盛の死後、旅に出た右京大夫は琵琶湖を前にして次のように述懐している。

海のおもては、深みどりくろぐると、おそろしげに荒れたるに、ほどなき見渡しのむかひに、うるはしき舟路にて、空はあなたの端にひとつにて、雲路に漕ぎ消ゆる小舟の、よそめに波風の荒く、なつかしからぬけしきにて、木草もなき浜辺に、たへがたく風は強きに、いかにぞ、波に入りにし人の、かかる

わたりにあると思ひのほかには聞きたらば、いかに住み憂きわたりなりとも、とどまりこそせめなどさへ案ぜられて、

258 恋ひしのぶ人にあふみの海ならば荒き波にもたちまじらまし

風景の荒涼さは作者の心象そのものである。波風の荒い琵琶湖畔に立つて、風の中にいた夢の資盛の状況を体感しているのである。

## II 比喩の夢

子 敏 関 今  
世界をすっかり変えてしまった源平の争乱。平家の滅亡。その状況が、「夢」に譬えられるのを看過できない。このよきな比喩の「夢」の語例は、平家都落ち以前の記述には見出せないのである。

寿永元暦などの頃の世のさわざは、**夢**ともまぼろしとも、あはれともなにとも、すべてすべていふべききはにもなかりしかば、よろづいかなりしとだに思ひわかれず、なかなか思ひも出でじとのみぞ、今までもおほゆる。見し人々の都別ると聞きし秋さまのこと、とかくいひても思ひても、心も言葉も及ばれず。まことのきはは、我も人も、かねていつとも知る人なかりしかば、ただいはむかたなき**夢**との

みぞ、近くも遠くも、見聞く人みな迷はれし。(中略) つひに秋の初めつかたの、**夢**のうちの**夢**を聞きし心ち、なにかはたとへむ。(204 詞書)

信じ難い現実を「夢」と捉えているのである。中略の部分にすでに引用した資盛の遺言がある。ついに現実となった平家都落ちはまさしく「夢のうちの夢」であった。

平家の人々は次々に戦死し、また、変わり果てた姿で引きまわされる。信じ難い平家の悲運もまた、「夢」と捉えられる。

211 あはれさればこれはまことかなほもただ**夢**にやあらむとこそおほゆる

宮中で言葉を交していた公達の悲報ばかりが耳に入る落ち着かぬ日々を過ごすうち、ついに資盛の訃報を聞く。喪失の悲哀は右京大夫を絶望の淵に立たせた。

又の年の春ぞ、まことにこの世のほかには聞き果てにし。そのほどのことは、ましてなにとかはいはむ。みなかねて思ひしことなれど、ただほればれとのみおほゆる。(後略)

222 なべて世のはかなきことをかなしとはかかる**夢**みぬ人やいひけむ

右京大夫にとって資盛の死は「かぎりある命にてはかなく(222 詞書)」「ただのどかなる限りある別れ(224 詞書)」と表現



される通常の死ではない。安らかに天寿をまっとうしたとは  
言えぬ戦いに散った若い命。覚悟はしていた。しかし、「な  
にをかためしにせむ(222詞書)」——比べようのない悲しさ  
である。

おなじゆかりの[夢]見る人は、知るも知らぬもさすが多  
くこそなれど、さしあたりためしなくのみおぼゆ。

(224詞書)

同じ悲しみに会った人は多いが、さしあたっては、やはり資  
盛の死を特別だと思うのである。

後年、再出仕の宮中で資盛の名を耳にして次のように述べ  
ている。

人の愁へ申ししことのあるを、さるべき人の申し  
沙汰するを聞けば、「後白河院の御時、おほせく  
だされける」などとて、このさめやらぬ[夢]と思  
ふ人の、蔵人頭にて書きたりけるとて、その名を  
聞くに、いかがあはれのことものめならむ。

(327、328番歌省略)

329 憂かりける[夢]の契りの身を去らでさむるよもなきなげ  
きのみする

又、通宗の宰相中将の死に際しても資盛が偲ばれる。

351 限りありてつくる命はいかがせむむかしの[夢]ぞなほた  
ぐひなき

「たぐひ」なき資盛の死そのものが、まさしく「夢」なので  
あった。それは、年月が過ぎても「覚めやらぬ夢」であり続  
ける。

#### 四、夢の時間——「昔」と「今」

##### I 今や夢昔や夢

建礼門院徳子を大原にたずねた記述に次のような「夢」の  
譬えがある。

(上略) 昔の御ありさま見まらせざらむだに、お  
ほかたの事がら、いかがこともなめのめならむ。まし  
て[夢]うつつともいふかたなし。(後略)

239 今や[夢]昔や[夢]とまよはれていかに思へど[うつつ]とぞ  
なき

240 あふぎみしむかしの雲のうへの月かかる深山の影ぞかな  
しき

ここは、時間認識が窺えるところである。239番歌では、時  
間を「夢」と譬えているのである。対照的な「今」と「昔」。  
いったいどちらが夢なのか。どちらが現実なのか。この場合、  
「昔」は、源平争乱期以前の平和な宮中を限定している。

右京大夫はその昔、「2雲の上にかかる月日のひかり見る  
身の契りさへうれしとぞ思ふ」と詠んだ。高倉帝は日、中宮

徳子は月である。月に譬えた徳子は「昔」の幸福の象徴であった<sup>220</sup>。しかし、その月は、平家滅亡とともに沈んでしまった。「昔」を喪失した「今」の現実を、大原で、目の当たりにするのである。

「昔」と「今」の対照を示す例はまだある。それらは専ら、資盛の死をめぐるものである<sup>221</sup>。

○資盛の遺言

また、もし命たとひ今し<sup>1</sup>ばしなどありとも、すべて今は、心を昔の身とは思はじと思ひしたためてなむある。(中略)よろづ、ただ今より身をかへたる身と思ひなりぬるを (204 詞書)

○右京大夫に対する資盛の最後の返事

(上略) さすがうれしき由いひて、「今はただ身の上も今日明日のことなれば、かへすがへす思ひとぢめぬる心ちにてなむ、まめやかにこのたびばかりぞ申しもすべき」とて、 (219、221 番歌省略)

220 今はずべてなにのなさけもあはれをも見もせし聞きもせじとこそ思へ

○資盛亡き後の右京大夫の歌

225 いかで今はかひなきことを嘆かずて物忘れする心にもがな

○再出仕の後

(上略) 高倉院の中納言の典侍と聞えし人、いまの内にさぶらはるるが、「あはむ」とありしかば、昔のこと知れる人もなつかしくて、その日を待つほどに、さしあふことありてとどまりぬ。 (259 詞書)

322 今<sup>1</sup>はただしひて忘るるいにしへを思ひいでよとすめる  
月影

以上の用例では、「昔」と「今」が対比され、「昔」(いにしへ)は、すべて源平争乱期以前の平和な宮中に、時間と場が限定されているのである。

本稿冒頭に掲げた『更級日記』の例にみるように、あまりに大きな喪失体験は、たとえ一時的なものではあっても現実認識を変えてしまうのである。それは時間認識の変容である。それまで、「流れる」、あるいは「積み重なる」と認識されてきた時間が変る。夢と観じる大きな喪失体験(『更級日記』では夫の死、『右京大夫集』では源平争乱と資盛の死)を境に時間が分断するのである。

II 価値ある「昔」

「昔」の用例には、恋の進行中の例、退出した後に宮中を思い出す例、亡き人の意もあるが、圧倒的に多いのが、源平争乱期以前の平和な宮中をさすものである。

○まずは、資盛の思い出に繋がる用例。

・(上略) かからでだに、昔のあとは涙のかかるならひなるを、目もくれ心も消えつつ、いはむかたなし。

(228 詞書)

・また物へまかりし道に、昔の跡のけぶりになりしが、礎ばかり残りたるに、

(237 詞書)

○再出仕の宮中は折あるごとに「昔」と比較される。

・藤壺の方ざまなど見るにも、昔住みなれしことのみ思ひ出でられてかなしきに、御しつらひも世のけしきも、かはりたることなきに、ただ我が心のうちばかりくだけまざるかなしき。(中略) 昔軽らかなる上人などに見し人々、重々しき上達部にてあるも、「とぞあらまし、かくぞあらまし」など思ひ続けられて、ありしよりけに、心のうちはやらむかたなくかなしきこと、何にかは似む。

(322 詞書)

○「昔」を知る人には特別の思いを感じる。

親宗の中納言うせてのち、昔も近く見し人にてあはれなれば、親長のもとへ九月尽くる頃申しやる。(334 詞書)

○さらに、藤原俊成九十賀では、「昔」の榮譽を感じる。

・(上略) やがてその賀もゆかしくて、よもすがらさぶらひて見しに、昔のことおぼえて、いみじく道の面目なめならずおぼえしかば、つとめて入道のもとへ、そのよし申しつかはす。

(355 詞書)

・返事に「(中略) なほ昔のことも、物のゆゑも、知ると知らぬとは、まことに同じからずこそ」とて

(356 詞書)

○年老いてから、新勅撰集に召され、定家と贈答。

・ 老いの後、民部卿定家の、歌をあつむることありとて、「書き置きたる物や」とたづねられたるだにも、人かずに思ひ出でていはれたるなさけ、ありがたくおぼゆるに、「いづれの名を」とか思ふ」とはれたる、思ひやりのいみじうおぼえて、なほただ、へだてはてにし昔のことの忘れがたければ、「その世のままに」など申すとて、

358 言の葉のもし世に散らばしのばしき昔の名こそとめまほしけれ

かへし

民部卿

359 おなじくは心とめける いにしへ のその名をさらに世に残さなむ

とありしなむ、うれしくおぼえし。

勅撰集に歌が載ることは、歌人として名譽なことである。その折、定家に、「今」と「昔」とどちらの女房名でと問われ、「昔の名(いにしへのその名)建礼門院右京大夫」を残すことにした。建礼門院に仕えていた若き日々に資盛に出会い、愛と死に向き合う人生となったのである。喪失した価値

ある時空をとどめるべく、「昔」の女房名を選んだのであった。こうして作品は閉じられる。

## 五、おわりに

『右京大夫集』において、作品世界の時間認識は流れず、積み重ならずに分断されている。喪失の深さは、本来流れるはずの時間を「存在」と「不在」、「昔」と「今」に隔ててしまふ。源平の争乱、平家滅亡、資盛の死を境に、それ以前の価値ある「昔」と、それを回想する「今」がある。「昔」と「今」に対立的に時間が認識されるとき、その対立を齎した喪失体験に対して「夢」の比喩が頻出するのである。

## 今 関 敏 子

睡眠中の夢もまた、現実の時間の流れと有機的に連関し合う。作品全体の時間の流れが滞る以上、『右京大夫集』に夢の記述が少ないのは当然であろう。睡眠時にみた夢を書くか、書かないかは、作者の資質と選択の結果である。必然性がなければ、夢が書かれることはないのである。

わずか2例の夢の記述がどちらも資盛に関する夢であるのは看過できない。ひとつ目は「昔」の恋の思い出の一齣であり、たとえ辛くとも、生きている意味を実感させる体験であった。もうひとつの夢は、そのような「昔」が失われた後の、資盛の滅びの予兆である。

二つの夢の記述が、作品の主題である「愛と死」を象徴しているのは偶然ではあるまい。

(教授 日本文学)

## ① 注

『とはすがたり』は、夢の記述なくしては、作品世界が展開しない作品である。夢は作者の人生の足跡、とりわけ精神の軌跡に密接に関連するのである。

## ② 西郷信綱『古代人と夢』平凡社選書一九七二

酒井紀美『夢語り・夢解きの中世』朝日選書二〇〇一

## ③ 今関敏子『更級日記』の作品空間と夢―虚構と存在把握― 『更級日記の新研究―孝標女の世界を考える』新典社二〇〇四年刊行予定

ただし、阿弥陀仏夢来迎の夢の記述順序は、夫の死の後になる。

## ④ 新潮日本古典集成『更級日記』(秋山虔校注)に拠る。

## ⑤ 『中世日記紀行集』(新日本古典文学体系・岩波書店)所収 『うたたね』(福田秀一校注)に拠る。

## ⑥ 『土佐日記』『紫式部日記』『讃岐典侍日記』『弁内侍日記』『十六夜日記』『中務内侍日記』『竹むきが記』には書き手のみた夢の記述がない。

## ⑦ 今関敏子『建礼門院右京大夫集』おける愛と死―資盛と隆信をめぐって―女流日記文学講座 勉誠社 一九九〇

## ⑧ 新潮日本古典集成『建礼門院右京大夫集』(糸賀きみ江校注)に拠る。

## ⑨ ⑦に同じ。

## ⑩ ⑦に同じ。

⑪ ⑦と同じ。

⑫ 今関敏子『中世女流日記文学論考』第一章「建礼門院右京大夫集」第二節 月―徳子の存在及び星に関連して」和泉書院 一九八七

⑬ たとえば、維盛の美しさの表現に「いづれも今の世を見聞くにも、げにすぐれたりしなど、思ひ出でらるるあたりなれど、気はことにありがたかりしかたち用意、まことにむかし今見る中に、ためしもなかりしぞかし。(214 詞書)」とあるが、この場合は、「昔」と「今」が対立しているわけではない。

⑭ ○源平の争乱を境にした対立的な用例のほか、「昔」には次のような用例が見出せる。

・資盛に出会う前を「昔」と表現する

すべて知られず知らぬむかしになしはててあらむ (119 詞書)

・宮中を退出して出仕時代を懐かしむもの

125 雲のよそにきくぞかなしき昔ならばたちまじらまし春のみ  
やこそ

126 大きくからにいとどむかしの恋しくて庭火の笛の音にぞ泣く  
なる

・亡き人の意

五月二日は、昔の母の忌日なり。(267 詞書)

○ 「昔」との対比ではない「今」には次の用例が見出せる。

・過去のことなのに、今のように感じられるの意

「ただ時のまのさかりこそあはれなれ」とて見しこともただ今の心地するを (115 詞書)

「わが立ち馴らすかたの木なれば、契りなつかしくて」といひしをり、ただ今とおほえて、かなしきことぞいふかたなき。

(247 詞書)

・その他

今さらめづらしくいふかたなく見えさせ給ひしに (3 詞書)  
ただ今の御心のうちも、さぞあらむかし (7 詞書)